

□10月6日説教(短縮版)隅野徹牧師  
「生きるとはキリスト」 フィリピ1:12～26

今回の説教題につけた「生きるとはキリスト。死ぬことも益なのです」は、誤解されやすい言葉です。勘違いしてはならないのが「生きるか死ぬか」ということは私たちが選べることではない、ということです。それはもちろん神の御手の中にあります。「生きることはキリスト」と言われているのは、キリストの救いにあずかることによって、始まる新しい命にあずかって生きる命のことを言っています。

キリストにあって痛みや苦しみから解き放たれて、天で神とともに新しい命を生きる。そのことを胸に抱き、この地上を生きることができてこそ、死ぬこともまた益だといえるのです。「死ぬことは益」とはまた、罪との戦いであるこの地上の生を終え新しい命に生かされることによって、罪に死んでいくことを意味しています。

パウロはこの地上で命があたえられている間は、キリストと共に信じる仲間と協力して生き、それによって神の業をすこしでも手伝いたいと望んでいます。しかし一方で望んでいるのは、自分自身の罪が滅ぼされ、キリストの命にあずかって新しく生かされることなのです。別の命が与えられる。2回生きられるから、それを望んでいるというのではありません。キリストによって罪赦され義とされる、その完成が地上を去って天に行く時だと理解しているからこそ、生きることはキリスト、死ぬことも益だと言っているのです。

私たちもできるだけ長く、愛する家族や友と助け合って生きていたい。そのなかで自分にできる神の手伝いをし、神を証したいと思うのは当然です。しかし愛する人と地上でずっと一緒にいられるわけではありません。いつか来る別れ…それは最大の痛みであり苦しみであることを、最近私も改めて感じています。しかし、そんな最大の苦難とも思えるような地上からの旅立ちも、キリストにあっては感謝すべきこと、喜ぶべきことがある。それを今回の箇所は私たちに強く教えています。そのことを覚え、希望をもって歩みましょう。(終)